

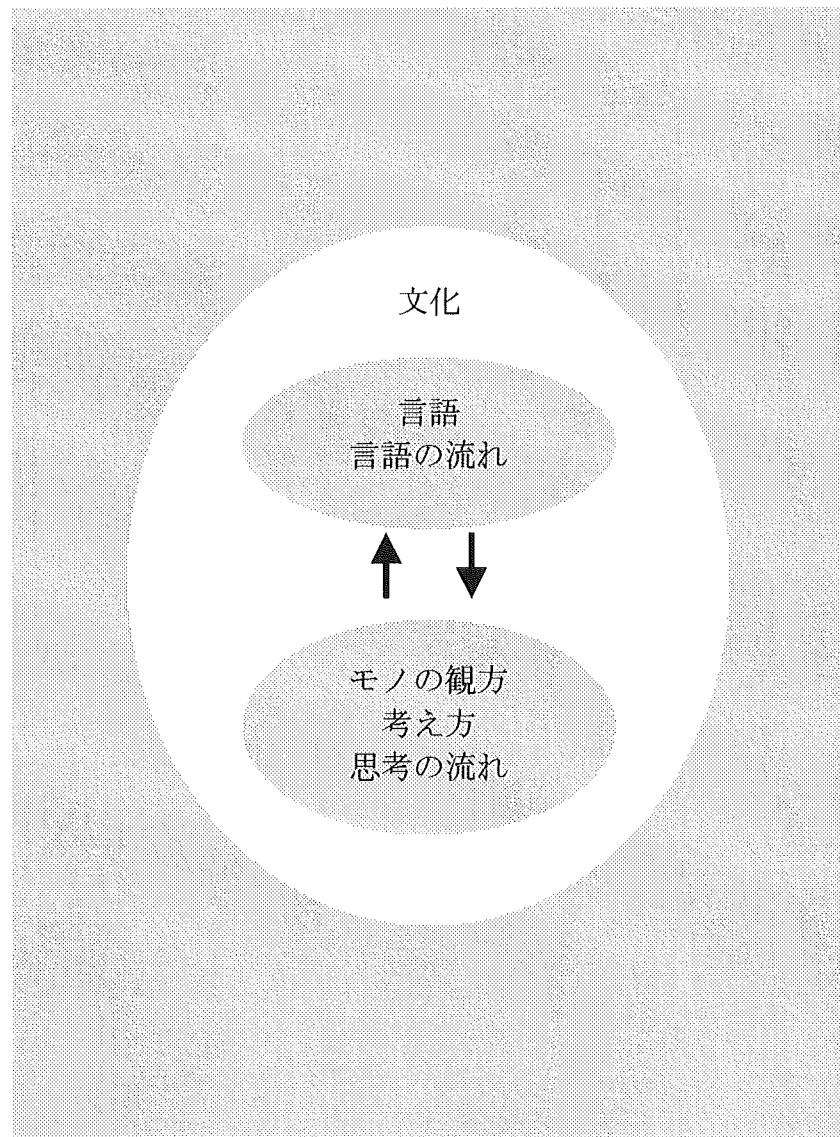
英語OSを搭載する
English Operating System
米国特許明細書の文章を教材として
英語文章の受信処理（読む、聞く）と
発信処理（書く、話す）

US Patent Specification
Abstract, Background and Summary of the Invention

知的財産活用研究所

はじめに

状況 (1) 文化と言語



文化と言語

ある程度まで同一的なモノの観方や考え方を共有している集団は、同じ文化を持っていると見なすことが可能でしょう。その、モノの観方や考え方は、言語で表現されます。同時に、人は言語でもって「考える」ことをします。従って、文化と言語は極めて密接な関係があり、一つの文化を共有している集団は、母国語もほぼ共有していると見なすことができるでしょう。文化が言語を生み、言語が文化を育てると言われるゆえんがここにあります。

母国語

その人の母国語とは、その言語でものを考えているのがそれで、例えば、厳密な意味で、「バイリンガル」と呼ばれる人は、二つの言語で、どちらででも考えることができる人を指します。筆者である私自身の思考は日本語で行っているので、母国語は言うまでもなく日本語ということになります。他の言語は意識して学習した外国語、どこまで行っても外国語に過ぎません。

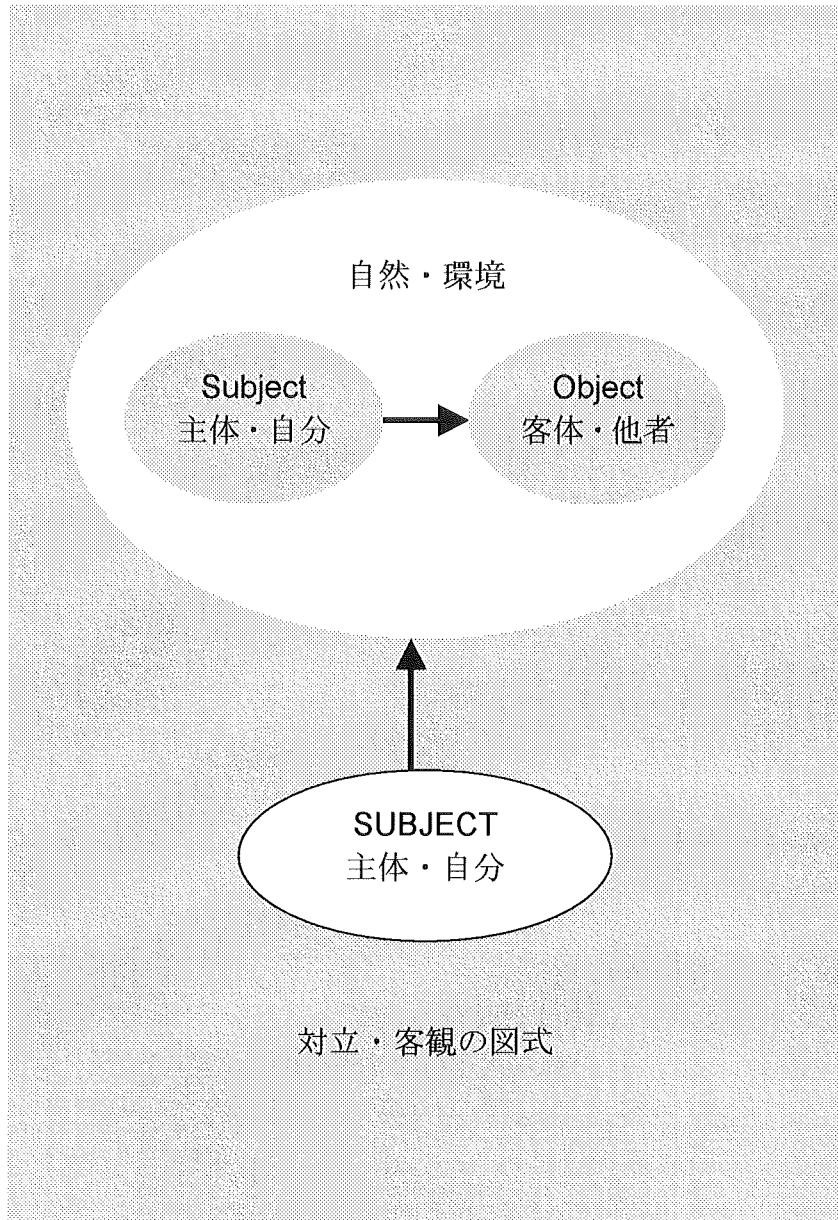
モノの観方

モノを見る方式は、言語の構造に反映されます。

モノを考える順序

モノを考える順序は、そのまま言語の順序に反映されます。これによって、人は快適に観察し、考え、それらを話し、書いているわけです。快適に、というのは、頭の中で衝突を起こしたり混乱したりせずに、意識せずに行えるという意味で使っています。

状況 (2) 西ヨーロッパ文化、あるいは西欧人のモノの観方、考え方と言語



英語O Sを搭載する

単純化を恐れずに、西ヨーロッパの人々の、モノの観方、考え方を一まとめにすると、以下のようになります。西ヨーロッパからアメリカ大陸に移住した人々も当然この中に含まれます。

自分の確認

自己は何者であるかの確認を、他者との比較において、絶えことなく続ける、それを機会あるごとに表明（宣言）する。

環境の中の自分

自分が、ある環境の中で、何を、何のためにしているのかを、絶えず確認し続け、機会あるごとにそれを表明する。

客観

自然および他者を、自分と対立する客体（Object）として、客観的に（objectively）観察し、分析し、評価し、報告する。ここから、自然科学が生まれ、発展する。また、人間が構築した社会も同じように眺め、分析し、評価しようとする。ここから、科学かどうかに疑問は残るが、社会科学という分野が生まれる。

客体（Object）への働きかけ

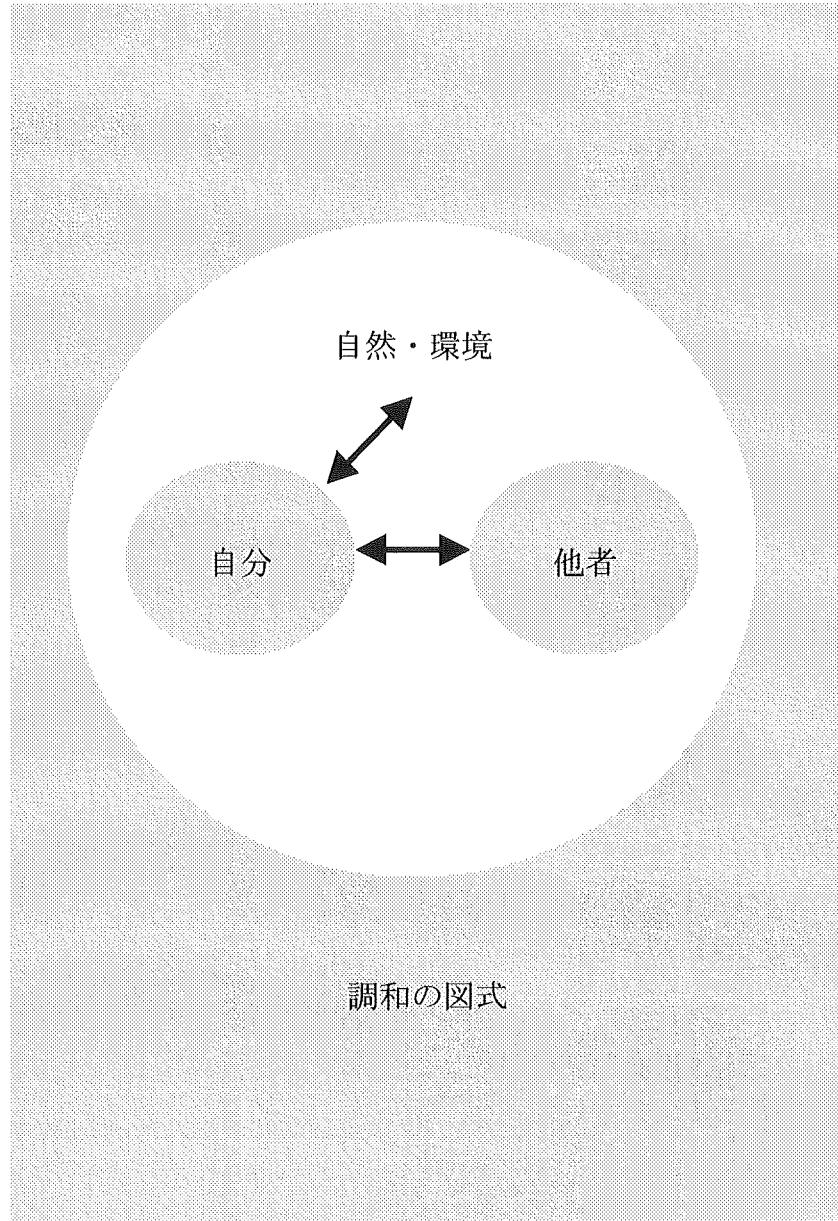
自分が、自然や他者に対して、何を、何のために働きかけているのかを絶えず確認し、それを機会あるごとに表明する。

情報重視

これらの基本姿勢から、自然や他者に関する報告を重視し、その情報収集に勤め、それを分析評価する作業（インテリジェンス）を重視し、そこへの働きかけを、戦略的計画の下に、行うという形が出てくる。

*すべて自己から発しているために、しばしば自己に都合の好い色眼鏡つき分析をして失敗するという副産物もあります。

状況 (3) 日本文化、あるいは日本人のモノの観方と考え方と言語



英語O Sを搭載する

私自身を含めて、日本人のモノの観方や考え方を、単純化をおそれずに図式化すると、以下のようにになります。

溶け込む

自然・環境の中に溶け込んで存在している自分を確認し、その自然・環境の説明をつけて、自分の存在を「控え目」に表明する。つまり、自然を客観的に眺めることはせず、その中に溶け込み、自然と一体化する。当然、ここからは、自然科学は生まれない。*進んで表明を行うものは「厚顔」とか、あまり良い評価を得られない。

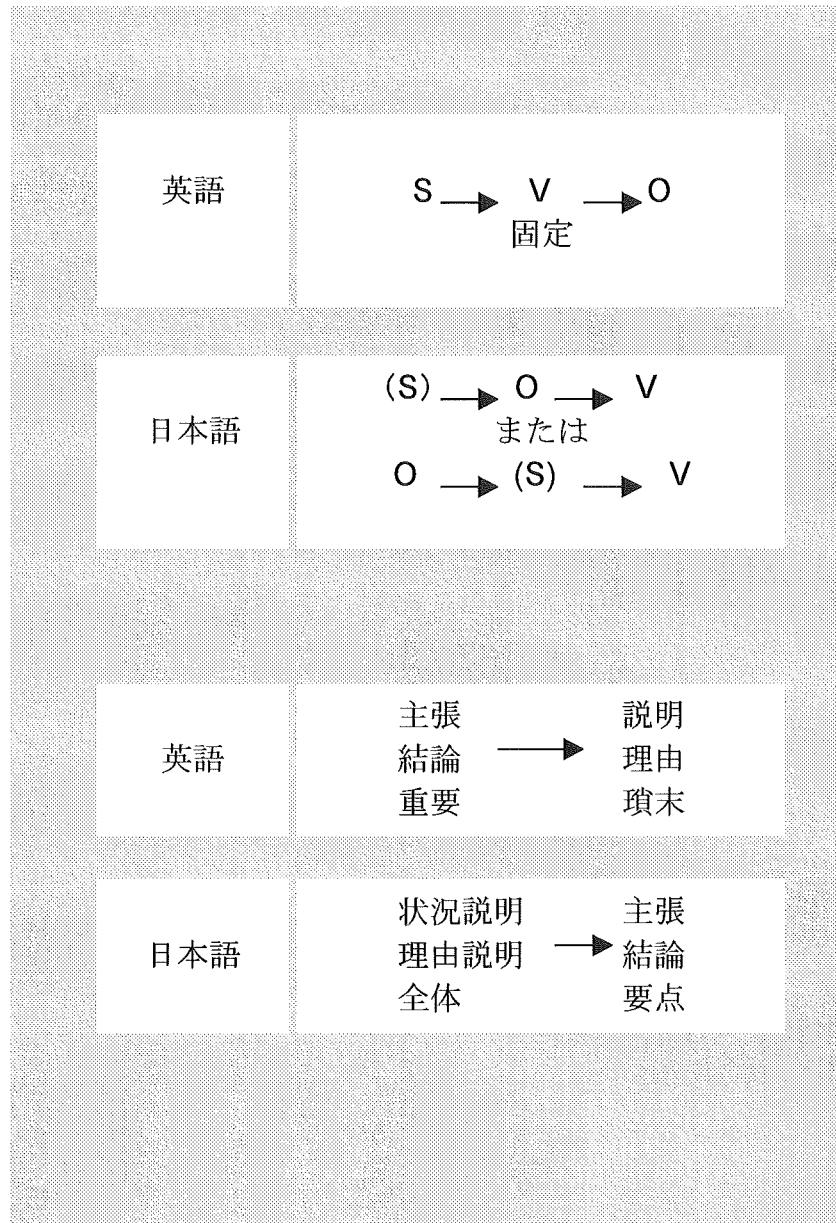
同列・対等

人間以外の生物を含めて、自分と同列の、つまり対等の存在と認め、その相手との関係の中で自分の存在を確認する。自己表明は、従って、相手の存在を意識し、調和を最優先してなされる。つまり、常に全体の中の自分という図式での確認であり、全体を語らずして自己を語ることは難しい。

*西欧の人には、どうしても理解できない考え方として、例えば、戦争という人為的危機（空襲とか）さえも、地震とか台風のような自然がもたらす災害と同列に受け止めてしまうという、日本人に基本的な対応の仕方がある。

*また、古い話で恐縮だが、第1次の南極観測隊がやむを得ず犬を置いて帰国した時の、日本人と西欧人の反応の違いにもこのことは見られる。われわれは、犬達を仲間として（自分と同列の存在）、せめて鎖を外してやっておけば、と痛恨の思いがした。西欧人は、何たる動物虐待と強い非難を投げてきた。連れて帰れないのなら、どうして殺さなかったのか、というわけだ。彼らにとっては、自己から見て犬は客体としての家畜であり、その生殺与奪は飼い主の責任ということになる。責任を果たさぬ残酷な動物虐待の日本人となってしまうわけだ。

状況 (4) 日本語と英語の違い



英語 O S を搭載する

以上のように、文化の違い、つまり、モノの観方や考え方の違いは、当然言語の違いに反映されています。それは、言語の構造の違いと、表現の順序の違いとなって現れています。

英語の特徴

英語の特徴は、日本語と比較した場合、以下の二点に現れています。

(1) 主体 (Subject) 抜きでは事が始まらない。S が何であり、それが何をしているのか (V)、客体 (Subject) に何を働きかけている (V) のかをはっきりさせる。流れも、この S V O に固定される。モノの観方の基本形であるから、この順序は変えられない。

(2) 自分が何者であるか、先ず主張し、その後で解説を加える。つまり重要なことを先に述べ、次第に瑣末の事項へと続く

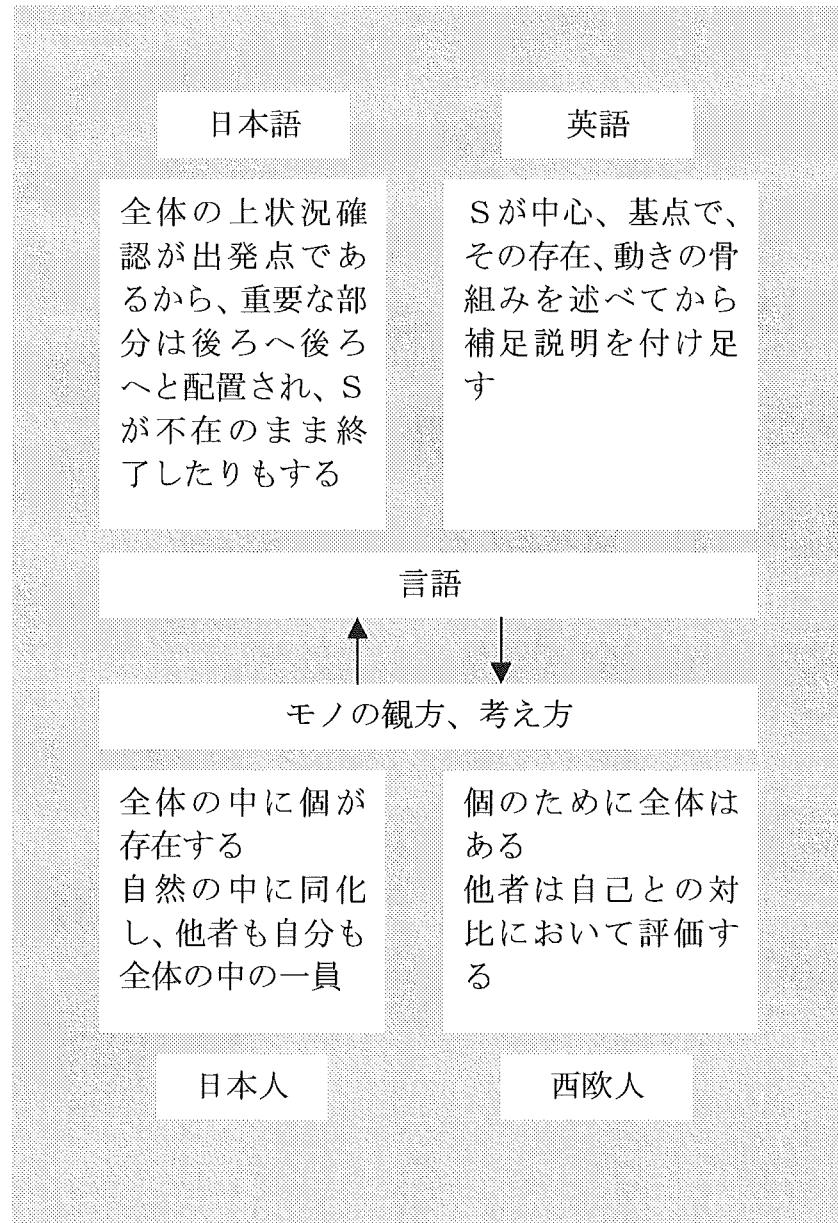
日本語の特徴

(1) 主体が全体の中に溶け込んでいるので、S を表面に出さなくとも、言語として成立。しかも、全体の説明から入るので、O を先頭にでも、途中にでも配置でき、何をどうしているのか、V を一番最後に置きさえすれば、その途中は自由に並び替えできる。

(2) 同じく、全体の中の自分ということから、全体を説明してから主張なり結論を述べる。これは、存在の基本形であるから、言語においてもこの順序は変えられない。

*日本語には主語 (subject) が無いと、極端な意見を吐く人もいますが、主語が無いのではなく、表に出さなくとも言語としての形を取れるということです。つまり、主語は存在するのだが、あからさまに表に出すことを控える、出さなくとも理解してもらえる文化の下の言語。

状況 (5) 日本人は英語が苦手



日本人が英語が苦手であることは、自他共に認めるところです。その優秀な頭脳との対比において、“日本の七不思議の一つ”などと西欧人にからかわれたりします。頭が良いのに、たかが英語ぐらいできないのはおかしいじゃないか、というわけです。しかし、苦手なのは、当然なのです。以下に、その要点を記します。

処理の順序

ここまでみてきて分かるように、人は言語（母国語）で考えるので、観方や考え方の違いは、処理する順序に現れる。英語と日本語の順序が違うことは、日本語処理手順にはそのままでは乗らないことになる。コンピュータ風に言えば、日本語オペレーティングシステム（OS）では、手順が違うので、処理でないことになる。処理不能の情報が入ってきたときの反応として、最も自然なのは、拒絶反応である。つまり、英語を言語として受け入れ処理することを、玄関口で締め出すという対応になる。

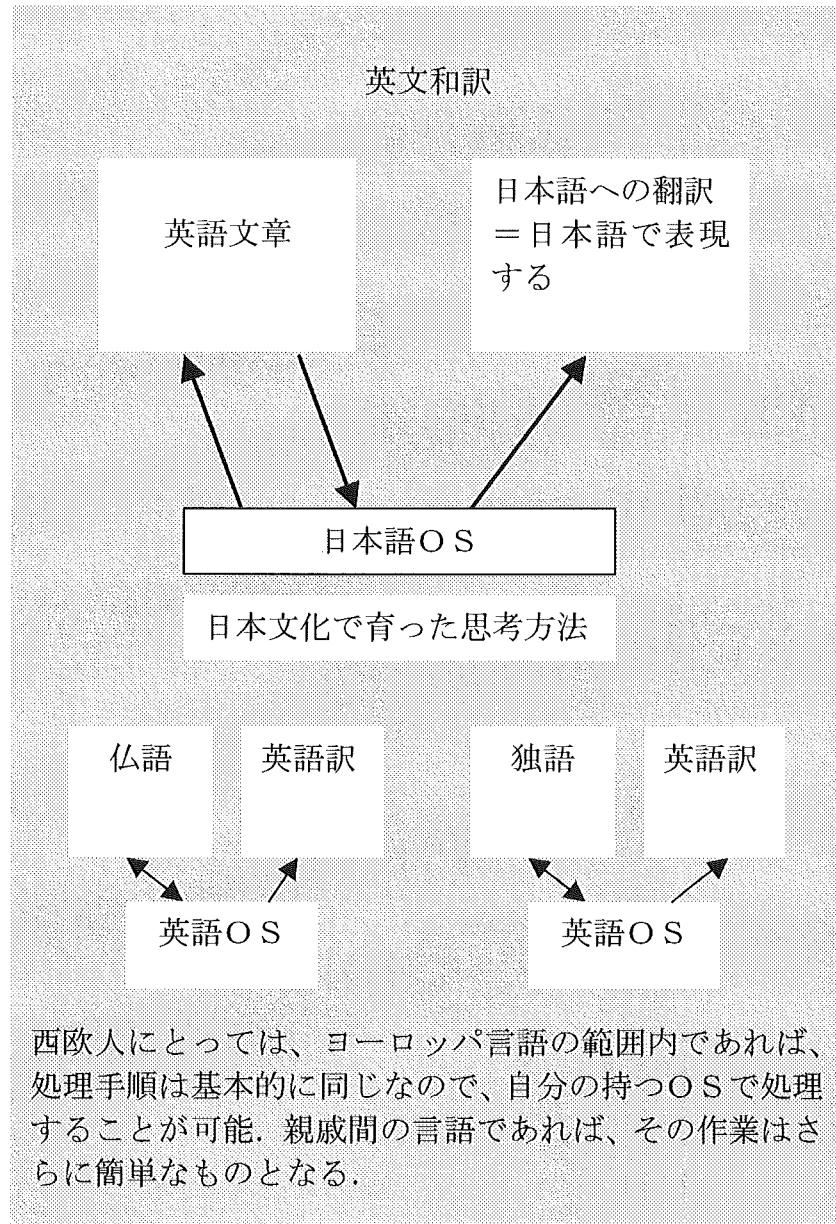
苦痛

異なる処理手順でモノを考えようすることは、至難の業であり、頭脳に多大の負荷を掛けることになる、その作業は明らかに苦痛であり、とりわけ、なぜ異なるのかという理解無しに、ただ闇雲に外国語を覚えることを強制されれば、その苦痛はさらに増えるだけとなる。

取り組みの第一歩

英語と取り組む第一歩は、何よりも、日本語と英語では処理の手順が異なることへの認識におかなければならぬといえるだろう。この認識は、果たして行われているのだろうか。

状況 (6) 従来の英語教育の誤り ; (1) 英文和訳



英語OSを搭載する

日本人はなぜ英語が苦手なのか、長年勉強をしてきているのになぜ身に付かないのか。その基本的な原因は、もともと、言語の処理手順があまりにも違いすぎるところにあることを見てきました。さらに、英語の教育方法に大きな誤りがあり、ただでさえ困難な英語修得という課題に大きな混乱をもたらしており、いまだに改善されていないようです。以下にその要点を示したいと思います。

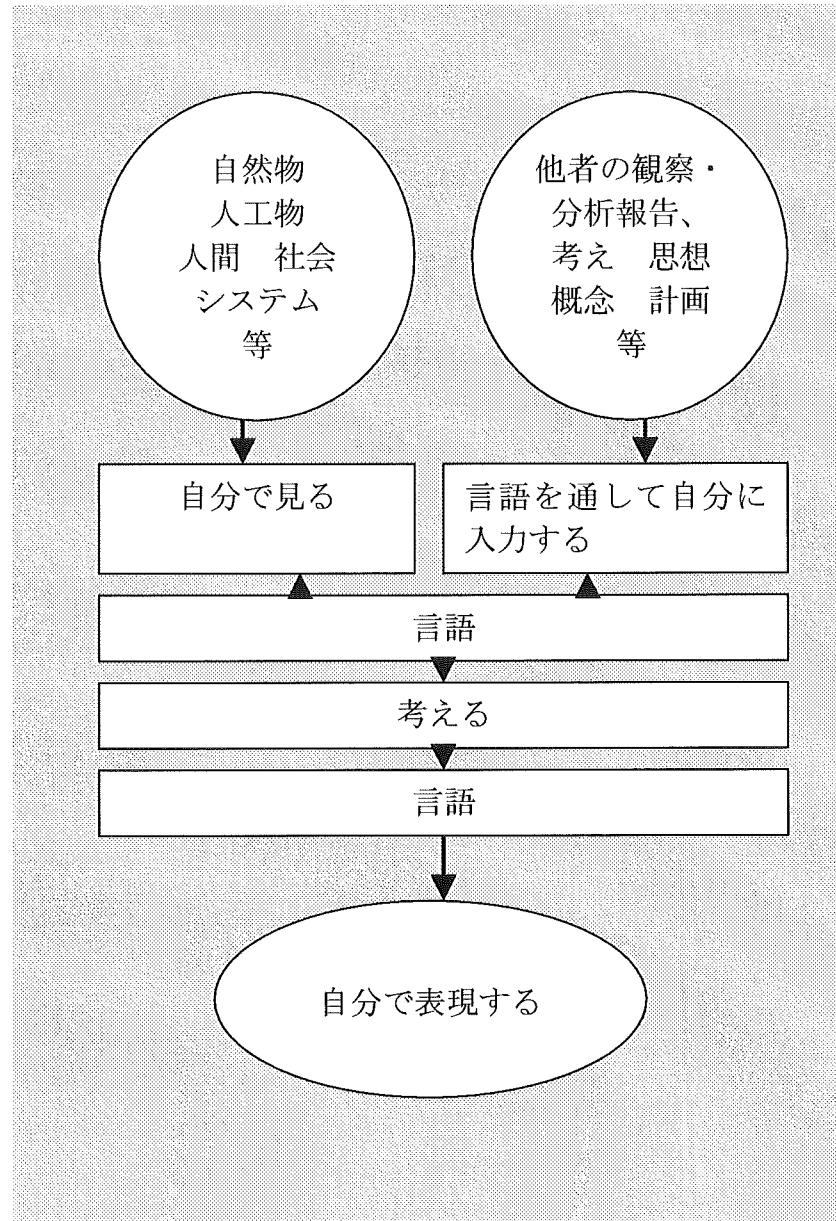
英文和訳

日本での英語教育の最大のガンは、英文和訳という「学習」を強いているところにある。この作業は、英語文章を、日本語処理装置（日本語オペレーティングシステム）にかけ、日本語処理手順で英語文章を「解体」し、日本語順序に並べ直して、日本語文章として表現することにある。日本語処理の頭で英語を眺めたときに、既にそれは言語としての英語ではなくなり、解剖対象の物体のようなものとなる。英文和訳の勉強は、英語の教科というより、むしろ国語の教科とすべきであろう。

なぜこのような学習方法が

日本人は、歴史以来、外国から事物、概念、システム等を輸入して利用するとき、すべて「日本風」味付けをするという文化的な習慣があり今も続いている。この習慣は、もちろん多くの面で利点として作用し、その結果、日本という存在の確認証明は保持してきた。一方、欠点も当然あり、その最たるものは、海外の思想、概念、制度、システムといったものを、「自己流に」理解し、それで理解したと思い込むところにある。生のまま、まな板にのせて、その本質を分析してやろうという対決の姿勢は持たない。

状況 (7) 従来の英語教育の誤り ; (2) 言語として扱わない



英語O Sを搭載する

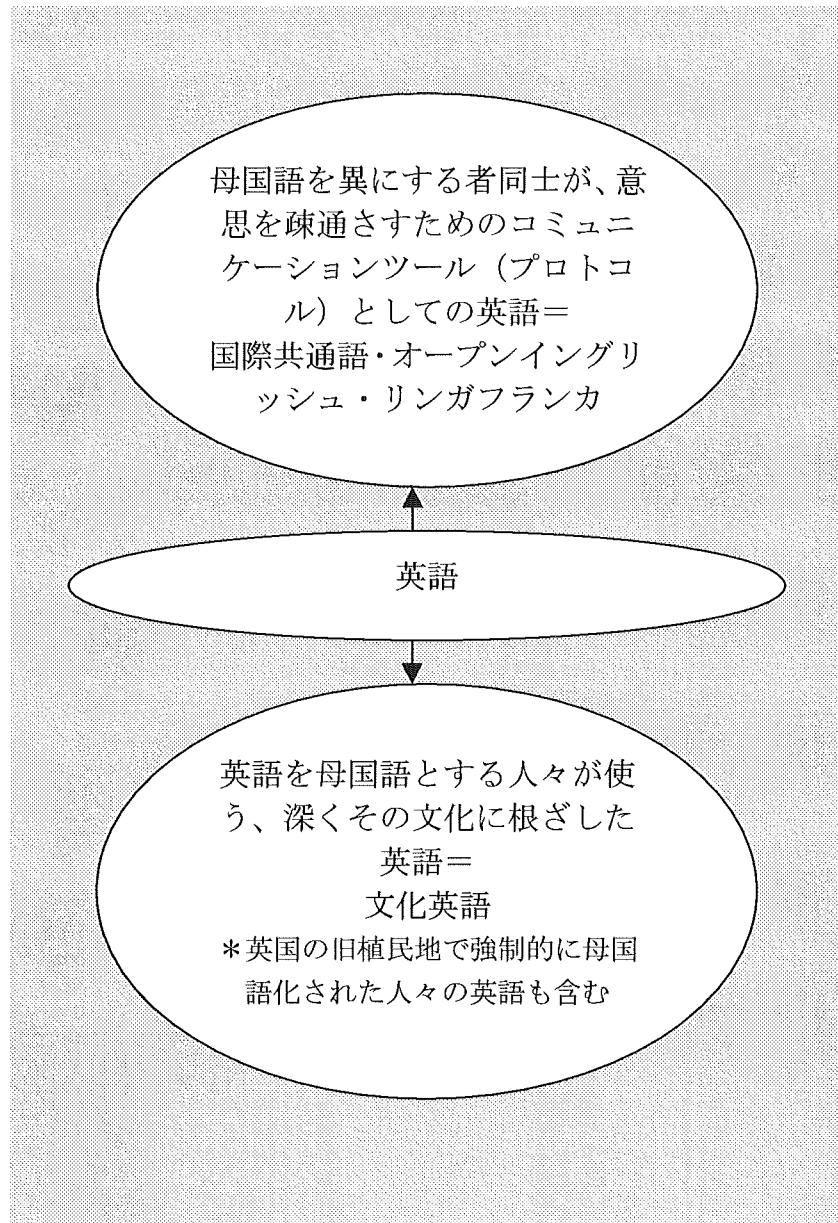
人間は言語を基盤にしてモノを考える、と述べてきました。そして、自分の考えを言語で表現します。従って、母国語以外の言語でモノを考え、その結果を表現することは、特に日本語のように、西欧言語とその処理手順が大きく異なる言語を母国語としている者には、大変な難事業となります。それでは、日本における英語教育は、どのような目的で、中学一年生から義務教育としているのでしょうか。以下に、若干の考察を記します。

言語として扱っていない?

一つの考え方を表現するには、そこに、言語として必要なまとまり、つまりセンテンスを形成していかなければならない。他とのつながりを持たない単語だけを並べても、そのレベルでは、何を言わんとしているのか相手に伝わらないので「言語」にはならない。*脈絡のない単語でしか表現できない人は、言語能力以前に、思考能力に欠けると見なされます。

日本語処理手順の上でいくら英語を解剖しても、言語としての英語が身に付かないことは既に(6)で記した。同時に、英単語とそれに相応する日本語単語のデータベースを頭の中にいくら増やしても、つながりを表現できなければ、それはまだ言語にはならない。それでは、日本の学校での英語教育は、生徒・学生にいったい何を学ばせ、身につけさせようとしているのか。日本語は英語と比べると劣性なので国語を英語に変える? (まさか)。外国人と道で会ったら「ハロー」と言えるようにする? (まさか)。海外でハンドバックのお買い物ができるようにする? (まさか)。米国に移住できるようにする? (まさか)。教養を高めるため、少しほは英語が分かるようになる? (まさか)。結論として教育意図は不明。

状況 (8) 従来の英語教育の誤り；(3) 文化英語の押し付け



英語O S を搭載する

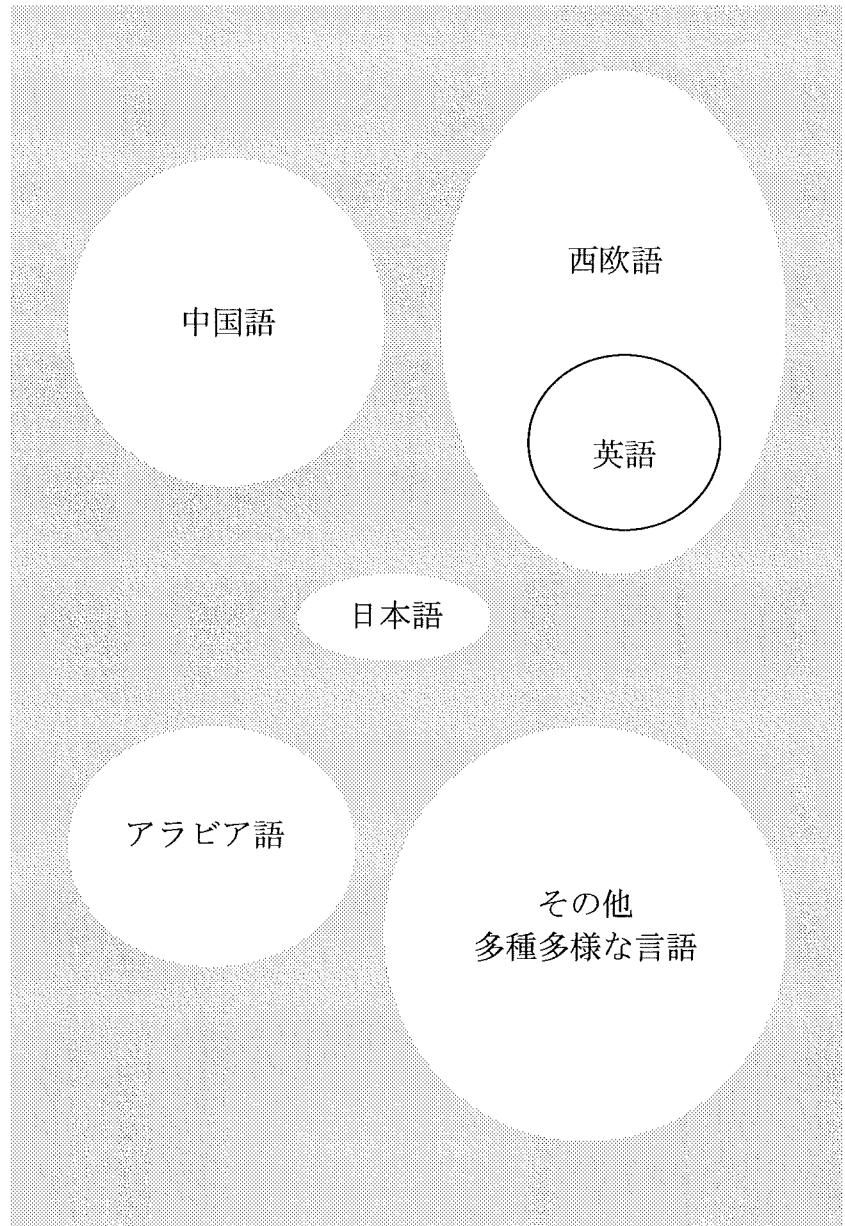
英語には二種あります。一つは、いうまでもなく、英語を母国語としている人々が使う英語（文化英語）です。もう一つは、母国語を異にする人々の間で、コミュニケーションを取るための手段として、唯一のものとして、（仕方なく）使う英語（国際共通語）です。日本の英語教育は、そのどちらを習得させようとしているのでしょうか。

アレルギーを起こさせる

処理手順が大きく異なる言語を学ぶことは、大変なことであることを述べてきました。その上に、さらに、文化としての英語を押し付けられれば、先ず大半の人はアレルギーが生じるでしょう。イギリスや米国の文化が、外国人に分かるわけもなく、発音が同じようにできるわけもないのですから。生徒・学生全員が「英文学者」になることを目指しているのなら話は別でしょうが、何で、文化に深く根差した慣用的な言い回し（イディオム）などを教室で勉強しなければならないのでしょうか。英語を嫌いにさせるための嫌がらせが、45年の戦争終結以降60年にわたって、いまだに学校で続いているのではないでしょうか。

学校で英語教育が必要というのならば、基本としては、英語というものを題材にして、言語というものに興味を持たせ、結果として日本語の能力を向上させることにあるのではないでしょうか。国際化した社会の中で、その前線で仕事をしたい者には、コミュニケーションのツールとして国際共通語としての英語処理能力を身に付けさせることでしょう。英米の文化、社会、文学等に専門的興味がある者は、大学で専門的に学べば良いし、ルイビトンのお買い物ができるようになりたい人には、街の英会話教室に任せるべきでしょう。

状況（9）日本語は世界の知的財産の一つ

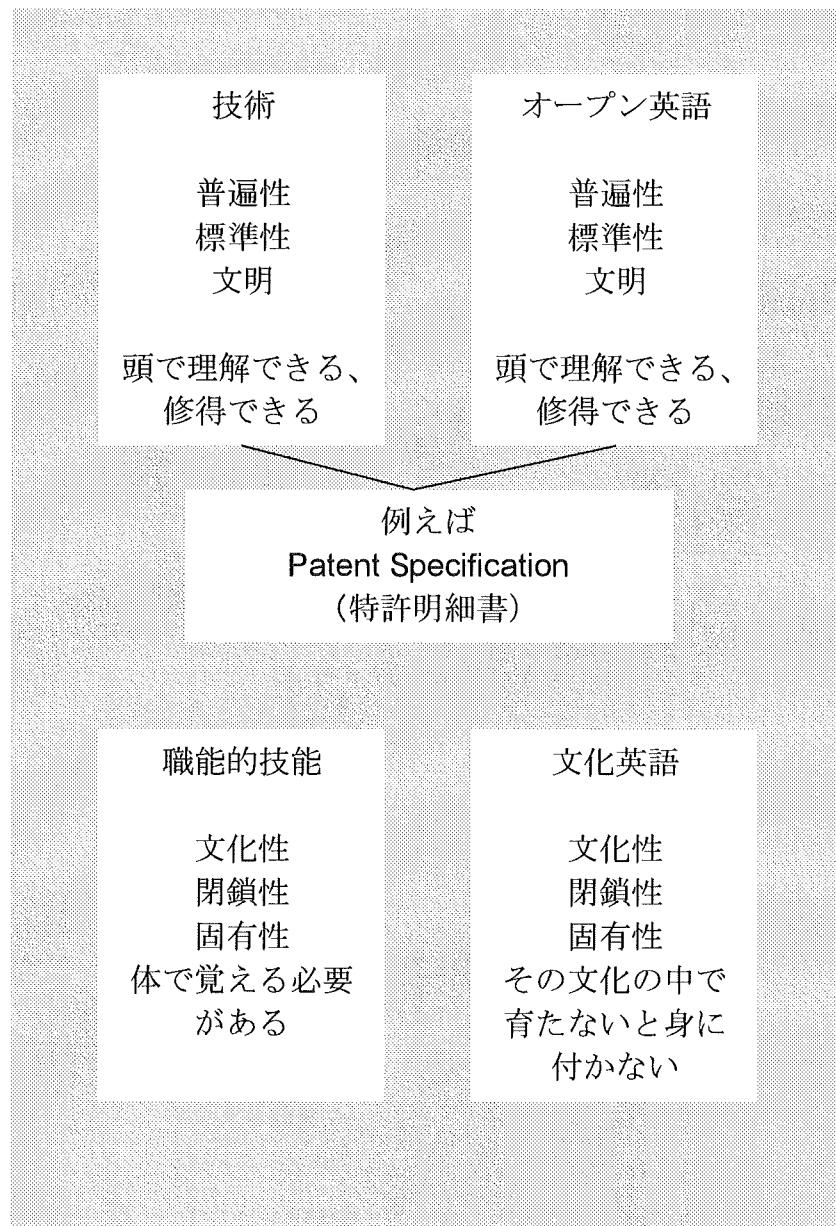


英語OSを搭載する

日本語は、数千年の歴史をかけて磨き上げてきた優美な言語であり、西欧の言語がローマ文明の力を借りて（ラテン語）その洗練度を上げたように、日本語も中国文明の力を借りて、つまり多くの言葉と漢字という文字を輸入してその洗練度を上げてきました。＊中国の知的財産である文字と、その文字で表された概念を有史以来無料で使ってきましたので、その使用料を払えといわれると莫大な額になるだろうという笑い話があります。もっとも、既に時効でしょうけれど。

しかし、西欧の言語のように、狭い地域で互いに刺激しあいながら磨いてきたのと違い、かつては中国からの輸入、幕末以降は英蘭独仏語の輸入以外は、日本語は自分達だけで磨いて来なければならなかった苦労もありました。結果として、日本語は世界の中で、特異ではあるが上質の、叙情的ではあるが論理的表現も可能な、極めて有用な言語としてその地歩を保持しています。世界の知的財産の一つと言えるでしょう。文化が言語を生み、言語が文化を育てるわけですから、全体として、日本語は磨き続けなければならないし、一人一人にとっても、思考と言語が互いに深く関連しているものである限り、日本語を扱う能力の向上は必須の課題です。その意味で、思考力と言語力がまだ発展途上の幼児や小学生の時から外国語を学ばせることは無意味であるだけでなく、極めて危険な試みといえます。個々の親が何を考えるか、それは勝手ですが、国の施策として出すなどは、暴挙というか、馬鹿というか、表現に困る主題と思います。また、英語やフランス語と比べると日本語は程度が落ちるという人もいるそうですが、本当にそういう人がいるなら、その知能程度が疑われます。

解決策 (1) オープン・イングリッシュを対象とする



英語O Sを搭載する

文明としての英語

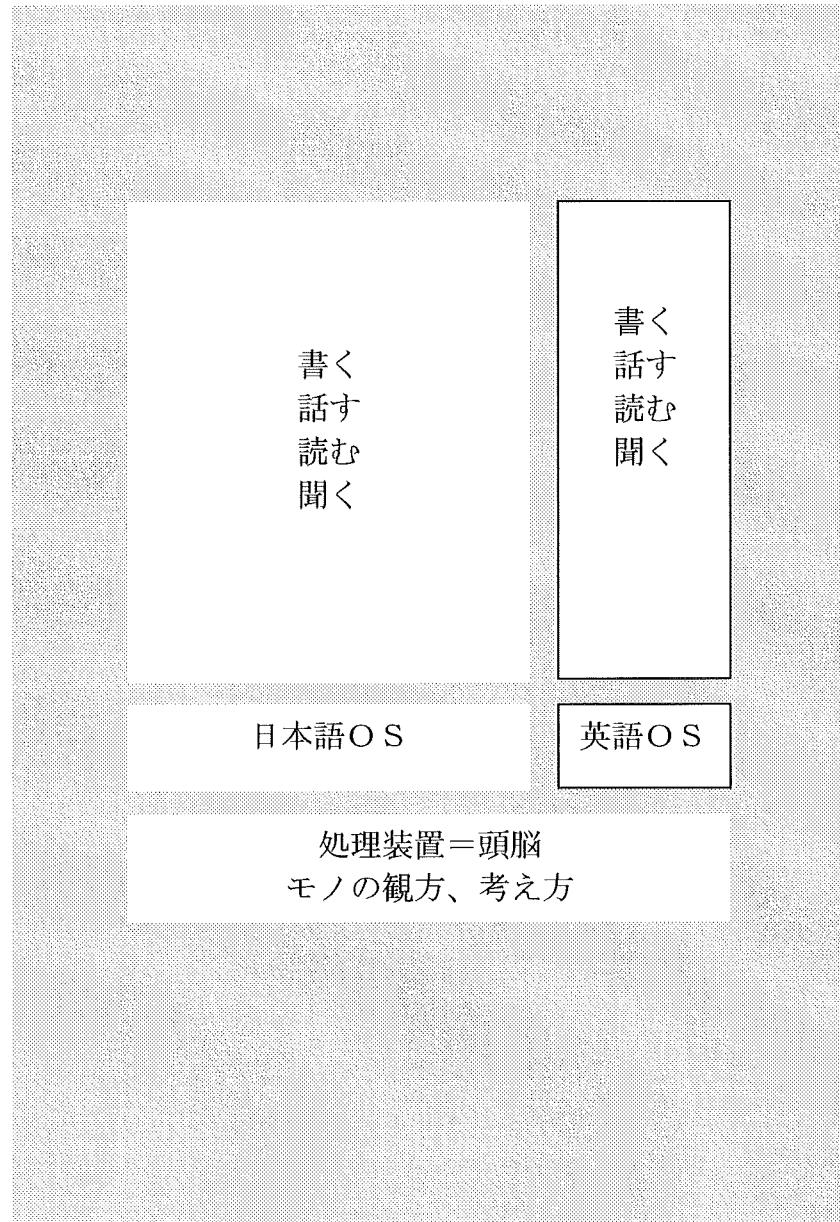
技術は、その原理、法則を頭で理解することができれば、民族、文化の違いに関係なく、人類の誰もが修得できるものと言えます。つまり、普遍性があり、その意味で「文明」と言えるものでしょう。世界の唯一の共通語としての英語も、誰でも学ぶ意欲さえあれば開かれているものとしての普遍性が高く、好むと好まざるに關係なく、一つの文明と言えるほどのものになってきています。*19世紀以降の、世界の政治経済の力関係の結果云々の議論は、ここでは控えます。

文明であるからには、標準性は日々強まり、頭で理解し修得できる対象になってきていると見ることができます。もちろん、一つの言語ですから、どこまで行ってもその文化の根っこは消えないわけですが、意思疎通の手段として、使う人の数が増え続ける限り、文化の香りはどんどん消えていく、つまり標準性を高めて行くことは間違いないところでしょう。

パテント

パテントは技術を言語で表現したものに対して、その権利が与えられます。文明である技術を、言語で権利主張するためには、文明である英語で表現するしかない、という状況になります。世界の中で、ほんの少数しか理解できないフランス語や日本語で表現されていては、普遍性は得られず、従って普遍的な権利主張はできないことになります。ここにおいて、英語を母語とする人々は圧倒的に有利であり、英語と同じ言語体系の西欧の人々はまだしも、まったく体系の異なる日本語を母語としているわれわれは、極端なまでに不利な条件を強いられていることになります。

解決策 (2) 英語OSをインストールする

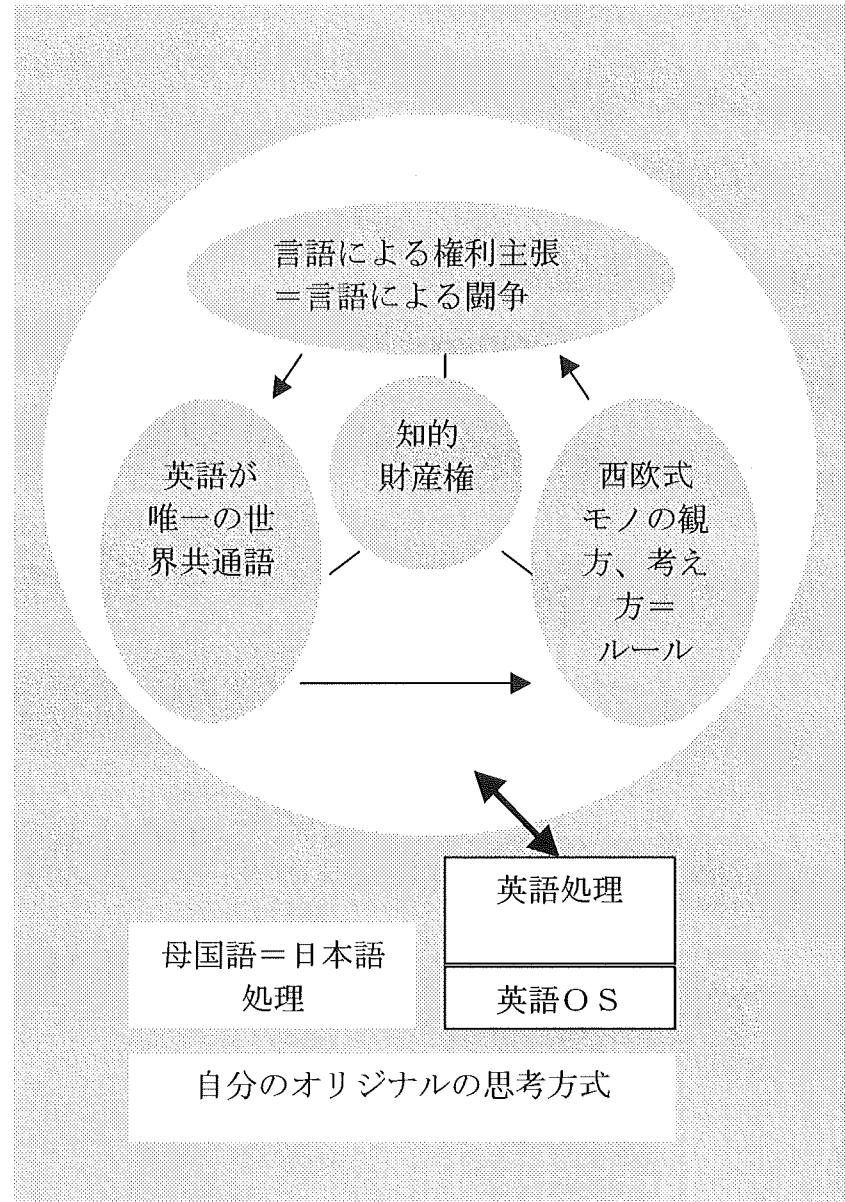


繰り返し述べますように、思考方式と言語は表裏の関係ですから、考え無しに別の言語を頭の中に取り入れると、混乱をきたして、思考方式、思考力そのものまでも壊しかねません。
＊子供への英語教育の危険性については、すでに若干触れてきました。その人の他者に対しての存在証明、自己に対しての存在確認の一つは、母国語である言語ですから、母国語の土台を侵食しかねない外国語の取り入れは避けなければなりません。一方、世界の中で存在し、あるいは企業という集団で闘うには、共通語である英語を扱えるようになる必要があるわけです。それでは、どうすればよいのでしょうか。

英語OSをインストールする

乱暴な意見に聞こえるかも知れませんが、解決策としては、頭の中に、日本語とは別にもう一つ英語を処理するオペレーティングシステムを搭載するしかないと思います。日本語OSの上で、日本語と英語という二つのウインドウを開いて処理しようとしても、二つの言語の間での変換処理は極めて難しいものになるでしょう。処理するのに時間をかけることのできる、読む、書く場合はまだしも、リアルタイムで処理しなければならない、聞く、話す場合には、余程、高速大容量の並列処理機能でも持たない限り変換処理は追いつきません。それ以上に、日本語風に（自分の都合のよいように）理解してしまう（理解したと思い込む）危険性、日本語風の表現となり、相手に誤解させてしまう（あるいは理解されない）危険性がこのやり方には潜んでいます。相手の意図するところを見抜けなければ、戦いは負けます。当方の言わんとするところが伝わらなければ、せっかくの努力も無駄になります。

解決策 (3) 人工的に、意図的に闘う



英語のルールで闘う

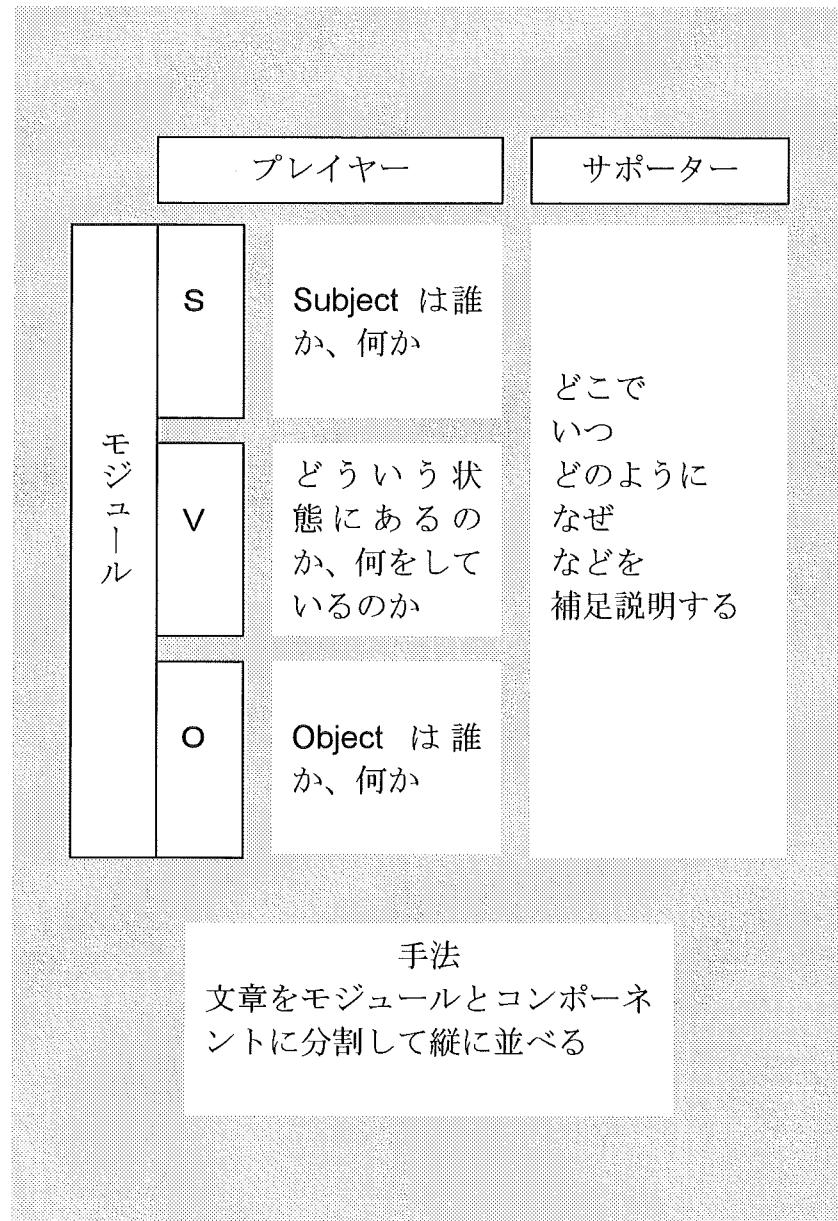
ここまで述べてきましたように、世界で唯一の共通語は英語ですから、オープンな世界、例えば特許等の知的財産の世界で闘うには、英語でやりあうしかありません。試合の規則は、残念ながら、英語に基づいており、その英語は西欧の思考方式に土台を置いています。力関係から見ても、日本語の特異性から見ても、日本語が世界のルールになる可能性はありません。

闘い方

相手が定めたルールで闘う時、相手のやり方を丸ごと取り込んでしまう危険性があります。日本語より英語の方が優れていると思い込んだり、考え方まで相手の方式、ここでは西欧式、になってしまうなどの極端な例もあります。この場合は、自ら進んで、自己の存在確認証明を放棄してしまうことがあります。言語と思考方式が表裏であるだけに、言語を習得する、利用する時の危険性は常に存在します。また、表裏であるだけに、異なる思考方式の上に言語だけを取り替えて表現することは、多くの場合理解されえない結果となるでしょう。*純日本風思考方式の上に日本語で表現されたものを、形だけ英語に変換しても、他国の人には、特に、考え方の違いが存在することに不慣れな米国人には、何が主張されているのかは、理解されないでしょう。

自分を失うことなく、ルールは英語式で闘うには、試合に臨むときだけ、普段の方式、つまり自分のオリジナル方式を、一時しまっておいて、意識的に、人工的に作り出した処理装置で、つまり英語OSを稼動させて処理するしかないのではないでしょうか。

方法 英語O Sの組み込み（1）構造を静的に把握し、構造的に構築する



英語O Sを搭載する

英語O Sを頭の中に組み込む作業の第一は、英語文章の構造を理解するところから始まります。構造を静的に把握し、自分で表現する時には構造的に構築するように心がけます。

(1) S V Oに分ける

英語は、ご承知のように、Subject(S)－Verb(V)－Object(O)で構成されます。これらを、モジュールという単位でひとまとめにくくりります。

(2) 骨格を確認する

英語の文章は、骨組みを構成するSVO それぞれのプレイヤーとそれらを修飾するサポーターで構成されます。プレイヤーの役割は、「SがVするOを」の基礎を述べることにあります。サポーターの役割は、それを、「どこで、いつ、どのように、なぜ」を具体的に説明補足（修飾）することにあります。プレイヤーとサポーターの存在を区別するためにも、モジュールの中をさらにコンポーネント単位に分割します。

手法

モジュールとコンポーネントに分割したものを、縦に並べます。これにより、先ず、構造、つまり基本の骨組み（プレイヤー）とその装飾部（サポーター）の組合せがはっきりと見えるようになります。

* S V Oは、英語の文法で習ったものです

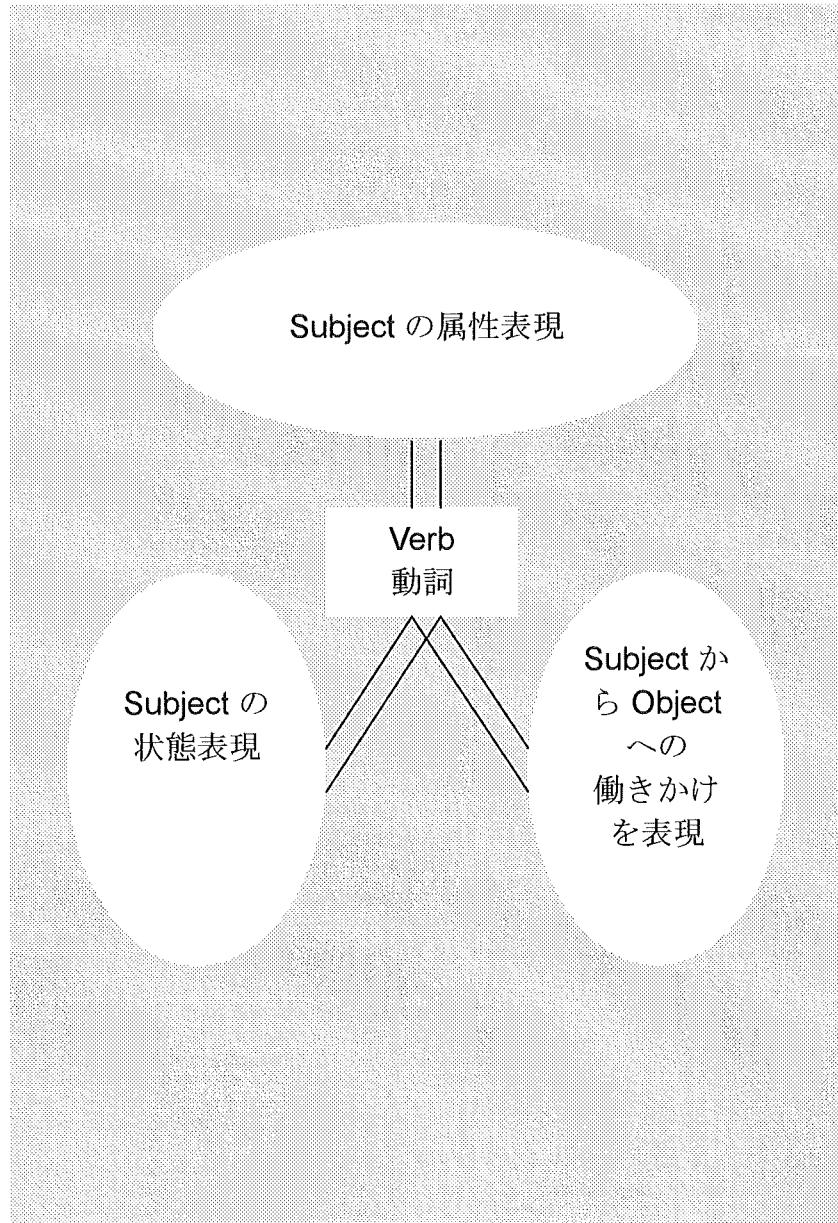
* モジュール、コンポーネントという概念の導入は、このテキストのオリジナルです。

* 英語は主部と修飾する者たち（modifier）に分けられるということは、次の教科書から教えられたものです。

「Basic Grammar for Writing」 Eugene Ehrlich McGraw-Hill

* 縦に並べる手法は、このテキストのオリジナルです。

方法 英語O Sの組み込み（2）何が表現されているか、何を表現するか



英語O S を搭載する

文章で表現する内容は、大きく分けると、左図のように、三分野になります。

Subject（主体）の属性表現

Subject の固有の質、永続的な姿、概念など、その属性を表現します。自分は何者であるかの宣言は、西欧文化においてもっとも基本的な事項ですから、属性表現はもっとも基本的な表現分野と言うことができるでしょう。*私が中学1年で習った最初のセンテンスは、“I am a boy（属性）”でした。見りや分かるだろうにと思ったことを覚えています。

Subject の状態表現

Subject がどのような状態にあるのか、何をしているのか、などが表現されます。*客観的な状況観察報告と、表現者の主觀に基づく報告の区別は難しい課題です。状況の正確な観察とその報告は、上級者（軍隊では士官）の基本任務ですから、基本の事柄の明示とそれに付随する詳細説明の区分けは、重要度の高いものから先に述べるという順序を含め、基本要綱です。

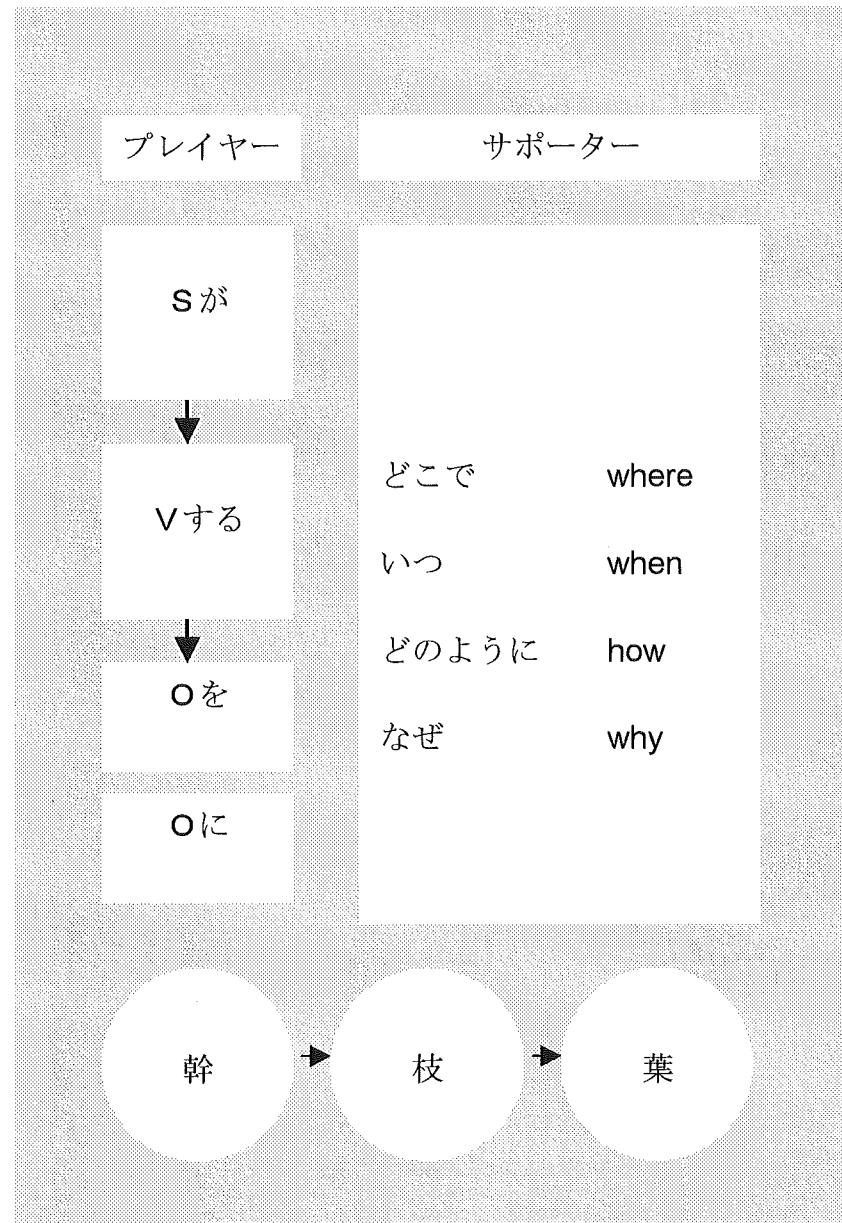
Subject から Object への働きかけを表現

主体とそれに対立する客体という図式は、西欧文化の基本姿勢ですから、「Sがー行うーOをーOに」という関係式を明確に示すことはきわめて重要な、基本的な事項です。*この関係をあからさまに表現することを控える日本文化の慣習が、色濃く残ったまま英語で表現すると、何がどうなっているのか明瞭でないとして、理解されない結果に成る惧れがあります。

動詞が軸

何を表現するのか、軸になって取り仕切るのは、動詞です。動詞がすべての文章の基本柱であり、これを基軸に三つの分野の表現が展開されます。

方法 英語O Sの組み込み（3）表現の順序の動的把握とその実施



英語O Sを搭載する

表現の順序は、モノを観るときの順序であり、考える順序でもあります。また、表現の順序は、同時に受け手の処理の順序でなければなりません。すでに述べてきましたように、英語と日本語の順序の違いが、日本人が英語を苦手とする最大の要因となっています。処理の手順が大きく異なるものを、一種類のOSで処理しようとするとき、大きな負荷がかかり、ひいては処理装置が拒絶反応を示すことになります。

英語を言語として受け止めるためには、その順序のまま処理する必要があり、また、その順序で表現しないと相手にコンテンツが伝わりません。

英語による表現の順序には、三つの特徴があります。

(1) SVOの順であり、これは変更できない剛構造である。
*日本語は、最後にVをもってくる鉄則さえ守れば、その途中の順序は自由にできる柔構造である。

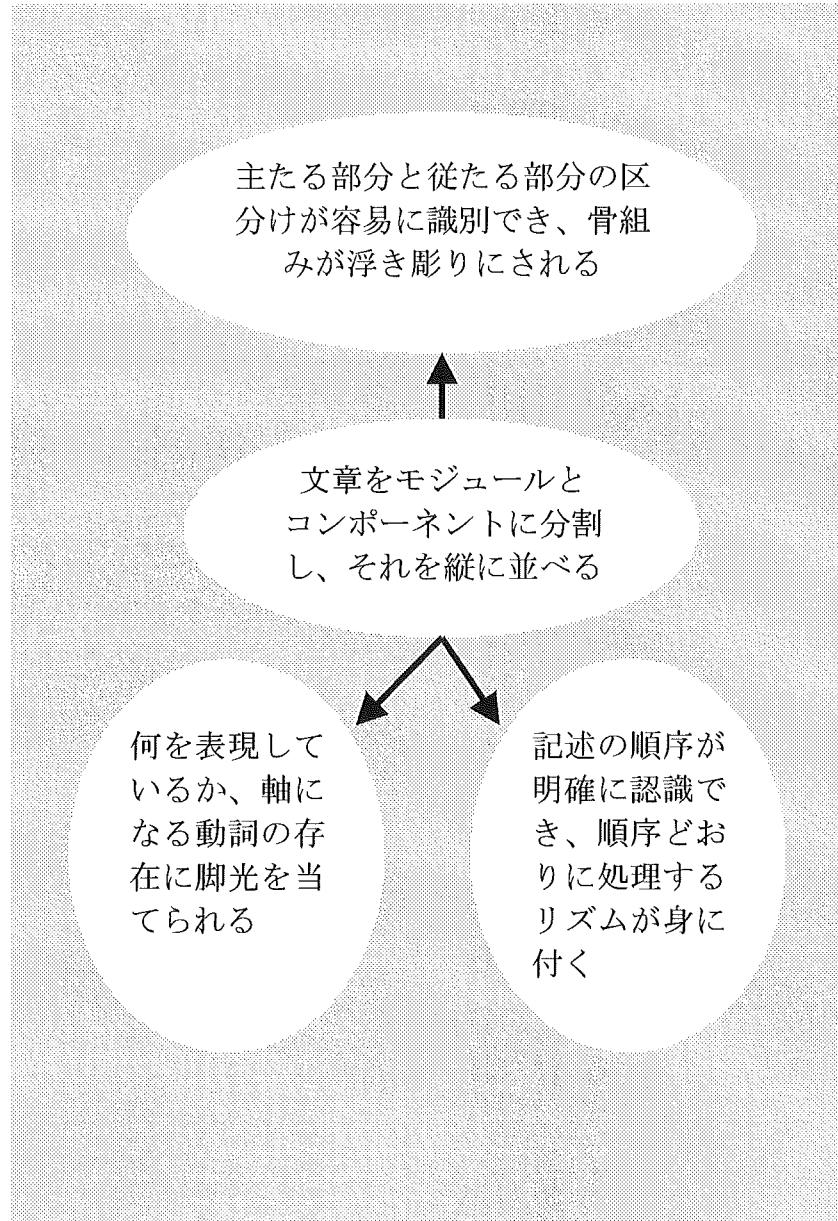
(2) 具体的説明（サポーター）の出番は、主たる記述（プレイヤー）の前と後ろと両方あり、統一性は欠けている。
*多分、オリジナルの英語は基本が前置で、後に、ラテン語の影響を受けて、後置が流行となった。長い説明群は後ろに位置するのが標準。

*日本語は、すべて、説明してから主部（プレイヤー）がでてくる。

(3) 重要なこと、主張したいこと、出した結論、これらを先頭に出し、次いで重要度の順に説明を付け加えていく。
*日本語は、枝葉末節の説明から次第に肝心点に進んでいく。

英語の順序のまま処理できるOSを頭の中に設置しない限り、つまり日本語処理の手順で対応している限り、たとえ何千時間、何万時間英語を取り組んでも、言語としての英語は身に付かないことになるでしょう。

方法 分割・縦表示の有効性



英語O Sを搭載する

英語の文章をモジュールとコンポーネントに分割し、それを縦に並べて表示すると、驚くほどその構造と流れが見えてきます。英語を母語とする人が見れば、ナンダコリヤと笑うかも知れませんが、外国語として対処する者にとっては、特に、表現の順序がこれほどまでに違う日本語を母語としている者にとっては、自分の都合の良いように表面上の加工して対処することに不都合はありません。英語を母語とする人、あるいは英語と同じ言語体系に属する西欧語を母語とする人にとって当たり前の、ページ一面にベタ書きされた文章に、汗水流して取り組まねばならないいわれはないはずです。表面加工をしても中身が変わるわけでもないわけですし。

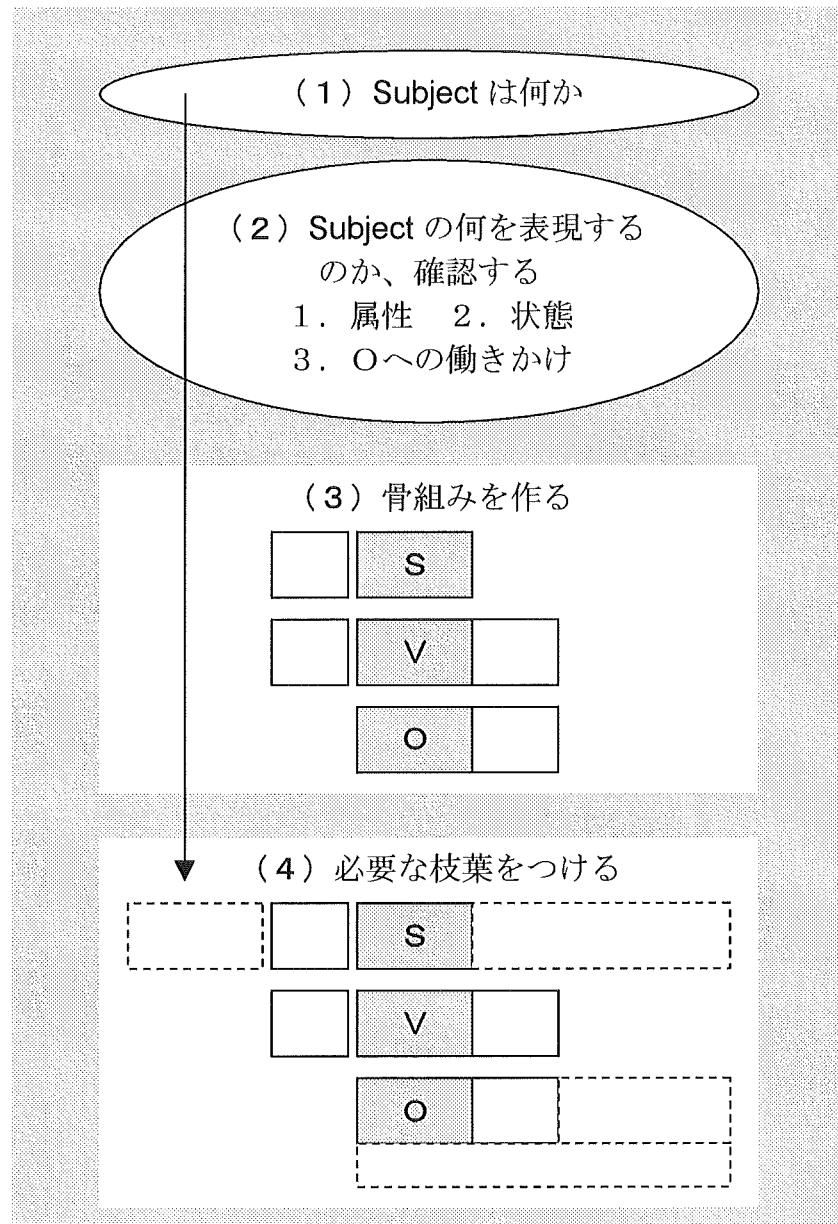
同時通訳の訓練でも

分割し縦に並べると、左の図に示したような利点があります。文章に対応する時には、視覚による支援が得られますし、さらには、この区切りに慣れると、聞き取りの力も大幅に向上がります。モジュールとコンポーネントという概念は言われていませんが、語られるセンテンスを固まりに分けて、そのブロックごとに処理していくやり方は、日本で、同時通訳の訓練方法として昔から採用されていると聞いています。語られる場合も、頭から終りまで一気に区切りもなく話されることはないので、区切りごとに捉えていくやり方が聞き取り向上に役立つことは、ここからも証明されているといえるでしょう。

表現に向けて

さらに、コンポーネントごとに組み立てていくことが、確かな構造で構築し、英語の順序で書き、話すという表現力の向上につながっていくことになります。

方法 自分で表現するステップ



英語OSを搭載する

自分で表現する（文章を構築する）場合の基本ステップを考えてみます。

(1) 主題を定める

Subject は何か、つまり、何について表現するのかを確認する。Subjectには「主題」という意味もありますから、その文章の主題を定めること、とも言えるでしょう。

(2) 叙述の種類を定める

Subjectの何について表現するのかを確認する。属性・性質について述べるのか、状態を説明するのか、Objectに対して何かをするのか。

(3) 骨組みを作る

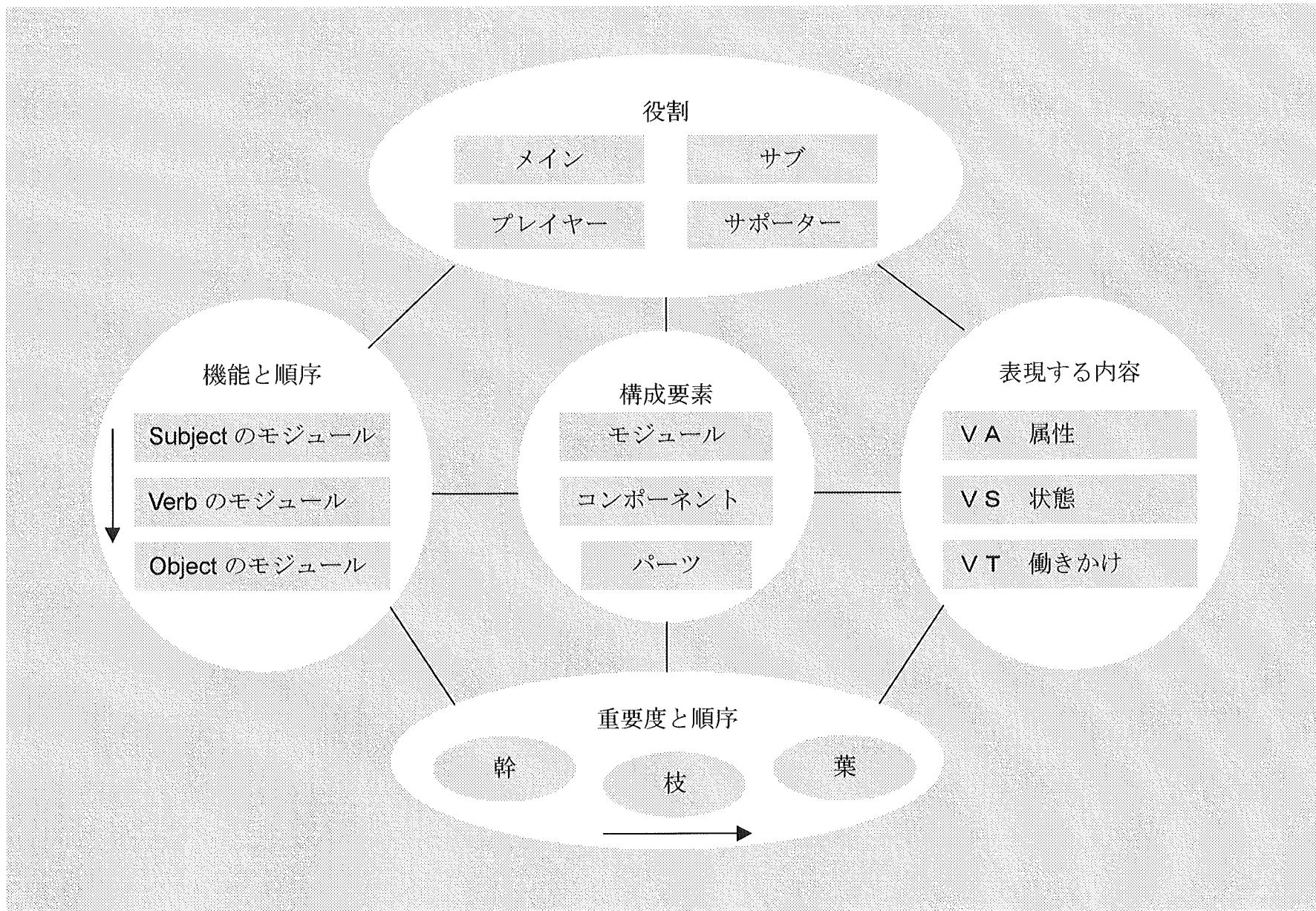
土台になる言葉の周りに、必要な最小限の言葉を付けて、基本となる意味がまとまり、文章として成立する最小限の構成を形づくる。

(4) 枝葉をつける

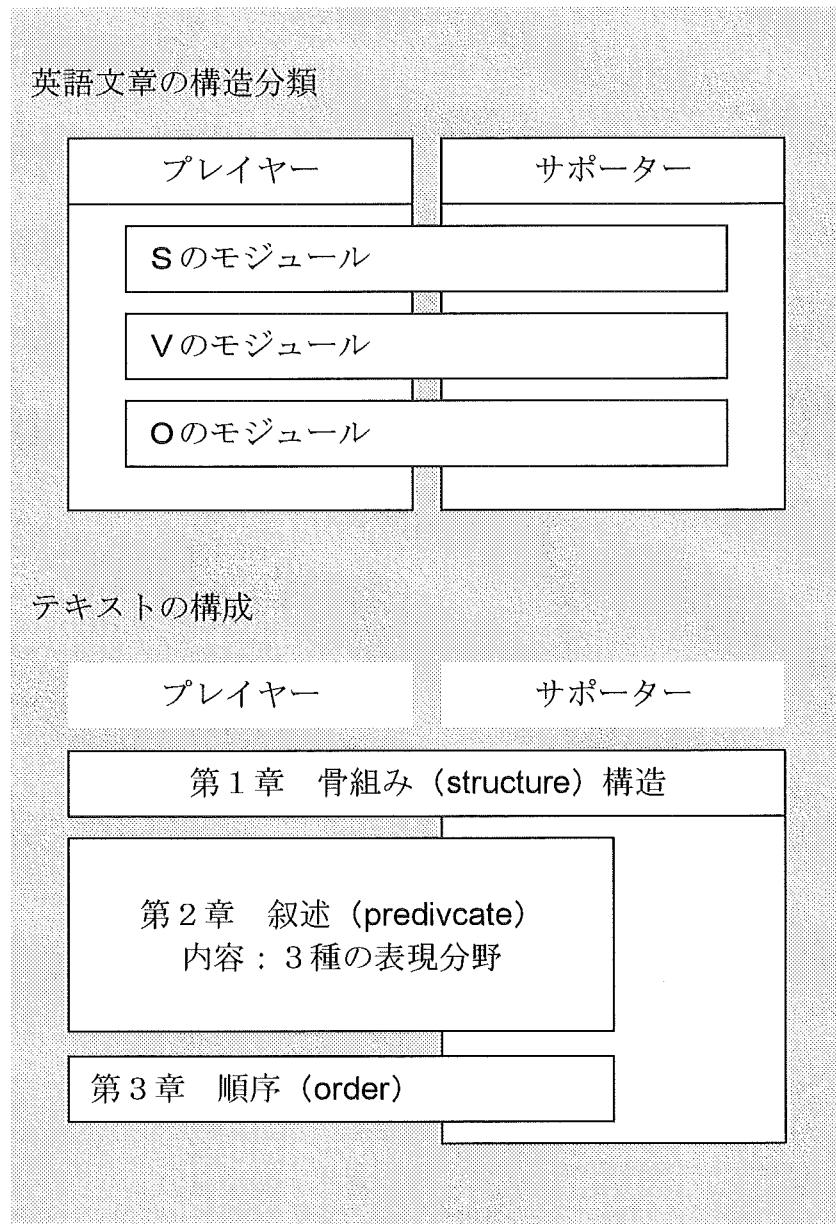
伝えるべき意味を、明確に、具体的にするために、必要な説明を付け加える。小説や新聞記事などでは、この部分で表現の腕前を示す技巧（修辞）がほどこされますが、特許明細書など、技術文書の場合は、何がどうなっているのか、どのような動作をいつ、どこで、なぜするのかなど、概念や事柄の明確化がこの仕上げの段階での課題となります。

なんだか硬苦しい方法を示しましたが、土台の思考方式も表現順序も大きく異なる英語で、明確に表現するためには、このようなステップでの確認と、実際に書く訓練の積み重ねは欠かせないところと思われます。

まとめ 英語文章の5ポイント



方法 テキストの構成と構造分類



英語OSを搭載する

構造分類

英語文章を構造的に把握するための一つの方法として、このテキストでは、縦横の座標軸で分類しています。

縦軸は、プレイヤーとサポーターで大別されています。横軸は、S: Subject、V: Verb、O: Object のモジュールに大別されています。

テキスト構成

テキストの章立ては、構造分類を下敷きにして、三つの章で構成されています。

第1章：構造を静的に眺め、理解することを目的とします。
基本概念は、1) メインとサブ、2) プレイヤーとサポーター、3) モジュールとコンポーネントの三つです。

第2章：何を表現するかを3分野に分け、動詞のメインプレイヤーを軸として、サポーターとの組合せで可能となる、様々な表現形式をみていきます。

第3章：英語と日本語の記述の順序の違いに意識を置いて、三つの観点からその順序を確認していきます。1) SVOの流れ、2) 幹から枝葉への流れ、3) “誰が・いつ・どこで・何を・どのように・なぜ” の流れ。

構造の理解から、正確に早く読むことが容易になり、構造理解と読解の実践の積み上げを掛け合わせる中から、自分で表現を構築していく（書く、話す）力が養われると思われます。そのことが、英語OSをインストールし、その上で処理機能・性能を上げていくことと、同意義であると、捉えてください。